

自由主義を問い直す：
古典的自由主義—新自由主義—社会的自由主義

吉崎 祥司

(北海道教育大学)

自由を至上視する「新自由主義 (Neo-Liberalism)」あるいは「リバタリアニズム」(ここではあえて両者をほぼ重なるものとしておく)の主張の根幹は、個々人の私的所有の自由の確保である。そしてその根拠は、一般に、J.ロックの「自己所有権論」およびこれを基礎とする私有財産権論(自己労働にもとづく自己所有)に求められる。自らの身体を所有する個人の労働の成果としての財産こそが、自由を保障し確保する(さらに言えば、市場と競争をつうじた所有の追求こそが社会の富裕化と、平等化をもたらす)のであって、社会以前の個人がもつこの権利は、絶対的に、もしくは最小限度でしか制限されてはならない、とされる。こうした理解は、新自由主義と古典的自由主義(その同定自体容易ではないが)とに通底しており、前者はそのようなものとしての後者の復興・再建でもある。

そのような同質性にもかかわらず、しかし古典的自由主義者にとって、たとえば以下のようなリバタリアンの主張は、いかにも嚙み下し難いものであろう。

マリー・ロスバードによれば、「〈権利〉の概念は財産権としてしか意味をなさない。なぜなら、人権であって財産権ではないものは存在しないだけでなく、財産権が基準として用いられるのでなければ人権はその絶対性と明確性とを喪失し、曖昧かつ脆弱になってしまうからである」。つまり、「独立した〈言論の自由〉などといったものは存在しない。あるのは唯一、自分のものを自分の好きなようにする権利、あるいは他の所有権保持者と随意的な合意を結ぶ権利という、ある人間の財産権だけであ」って、「いかなる具体的な場面においても、財産権を超えた〈言論の自由の権利〉や報道の自由の権利を人が持つことなどありえない」(翻訳『自由の倫理学』、132-3 ページ)のである。すべての自由・権利を私的所有権に還元するリバタリアンのこうした自由観が、古典的自由主義者ないし(新自由主義者を除く)自由主義者一般の自由観から少なからず隔たっていることは、疑いのないところであろう(もっぱら所有においてのみ自由を語ることへの自由主義者一般の違和感)。ことほどさように、新自由主義と古典的自由主義とは異なってもおり、この違いは自由観から社会的公正論(新自由主義は同感論などの構造をもたない)まで、多岐にわたる。

その限りでは、新自由主義は古典的自由主義の鬼子という他はないが、そうした鬼子を生み出したものの根源こそ、自由主義の個人主義的・所有主義的把握、すなわち「所有的個人主義」であっただろう。じじつ、古典的自由主義の歴史的推転は、今日流の新自由主義的様相を濃くしていたのである。

かくして、自由主義の展開が人びと多数の不自由を結果するというパラドキシカルな状

況において、自由主義の内部から自由主義革新の思想運動が湧き出ることとなった。この革新運動は、イギリスにおいては J.S.ミルを転回点とし、T.H.グリーンらの理想主義を介して、L.T.ホブハウスや J.A.ホブソンらの「新自由主義 (New-Liberalism)」＝「社会的自由主義」において、時代の決定的な影響力を獲得するにいたる。この新自由主義＝社会的自由主義の理論的核心は、端的には「コレクテヴィズム (collectivism)」であろう。これは、一方では、個人労働に由来するがゆえに財産の再分配を原則的に拒否する一般的な自由主義的観念に対して、労働・生産が通時的にも共時的にも（とくに産業化された近代における社会的分業の著しい普遍化）共同的であるがゆえに、分配には常に社会的な取り分が含まれる（「社会財」の概念）として、再分配については福祉国家を原理的に基礎づける。同時にそれは、他方では、自由の基礎を成長の観念におくとともに、その成長は他者との交通においてのみ実現されうるとみなし、かつそのような自由が万人に確保されるためには、自由は制限を含むこと（「すべての社会的自由は制限 **restraint** を基礎としている」）、つまり侵害者・強者に対する規制（「強制に対する強制」）が不可欠であることを強調する。社会的自由主義という形態での **Collectivism** は、個人が社会に先立って存在するのではなく、諸個人は关系的・共同的・協働的な存在であること、そのような存在として諸個人の生産物・財産には個人的成分と社会的成分とがあること、そして社会をなして存在する諸個人の平等な自由のためには自由は制限されなければならないことを主張するものであり、まさしく所有的個人主義に対置される自由主義というべきものであろう。新自由主義・リバタリアニズの真の克服が、したがってまた、あらためて「自由主義を問い直す」ことが、現代の依然として重要な課題の一つであるとするならば、自由主義思想史上における社会的自由主義の本格的な吟味を欠かすことはできない。